
Tomorrow's evening newspaper

スカフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tomorrow's evening newspaper

【Nコード】

N4424A

【作者名】

スカファイ

【あらすじ】

私は家に帰りたくない。だって家にはママがいるから…。ママはパパと離婚してから変わった。いつしか私や弟に暴力を振るう様になった。だから家には帰りたくない。けど、そこが私の家だから帰らないワケにはいかない。

001 朝

夢を見た。

それがどんな夢か忘れちゃったけど、とても楽しかった。

だから覚めたくない。

ずっと夢の中にいたい。

けど…起こされた。

ってより、何故か自然に目が覚めた。

目を開けるとママがジッとこっちを見ていた。

「…………ママ？」

「…おはよう。学校の時間よ…あそこにパンとミルクがあるわ…」

「…うん。」

私が身体を起こすと、ママは少し離れたトコに寝てる弟の『マサキ』のトコへ行った。

マサキは生まれつき喘息でよく発作を起こしていた。

どうやらゆづべも発作を起こしていたようだ。ママの顔を見ればわかる。

疲れ気味のママの顔。

私はすぐにミルクを飲みパンにかじりついた。

「……んぐっ」

いつも朝は食パン1枚と一杯の牛乳。

いつもってより、パパがいなくなってから…

半年前、パパは別の女の人とママと私と弟を捨てて出て行った。

あまりの突然にママは狂った様に泣いては暴れた。

私も弟も一緒に泣いていたらうるさいと殴られた。

痛い痛かったけど我慢した。

だってママの気持ちわかるし…子供の私にはどうする事も出来ないのだ。

その事もあって弟の喘息もよく発作を起こす様になった。

ママが怒ると弟は発作を起こす。するとまたママは怒り、殴られる。ずっとその繰り返し。

でも最後にはママから折れて謝って来る。

泣きながら…。

泣きながら謝られると、つい許しちゃう。

ママだって本当は辛いんだ。

苦しいんだって…

寂しいんだって…

「ほらっ！いつまでモグモグしてんだいっ！！さっさと食べないと遅刻しちゃうだろっ！！」

その声が聞こえた瞬間、視界が揺れ、頭に振動が襲った。
ママが私の頭を殴ったのだ。

「……っっ！！」

私はびっくりしつつ、頭を押さえた。

「もう何やってんだい！！さっさと歯を磨いて準備しなさいっ！！
もうアンタがいつまでもこんなだからママはこんな苦労して…！」

私はすぐに洗面所に向かい歯を磨いた。さっさとママの言うことを聞かないとまた殴られるし…怖い。

「あゝあ！アンタとマサキがいなければ何とかなったのになっ！！
こんな時子供なんて何の役にも立たないんだからっ！！」

ママはそう言いながら私の食べかけのパンをごみ箱に捨て、ミルクを流し台へ流した。

「ほらあもう！どんどん時間が過ぎちゃってるだろ？早くしないかっ！」

私はタオルで顔を拭くとすぐに走りだし鞆を手を取った。

「いいかいつ！？ちゃんと勉強だけはしなさい！そしてちゃんと稼げる仕事をしてママを楽させて！今は女も稼がないといけない。だからその為にも勉強を…」

「行つてきまあゝす」

ママが言い切らないうちに私はすぐに家を出た。

時々家が嫌いになる。

ママの事も嫌いになる。

唯一、弟だけが私の支えだ…。

けど喘息持ちの弟は正直頼れない…。

やっぱり自分の身は自分で守らなければいけない。

私は毎日、学校へ行く前に寄り道する場所がある。

それは家から5分くらい離れた大きな一軒家である。

そこに大きな白いワンちゃんがいて、毎日なでなでするのが私の日課だった。

ワンちゃんは私を見るや否や舌を出して尻尾フリフリしていた。お返しに笑顔で抱き着いた。

「あはは…もうくすぐったいって…」

「おはよう。今日も元気じゃな。」

窓から身を出したおじいちゃんが声を掛ける。

おじいちゃんは去年、奥さんを亡くし、今は一人でこの家に住んでいる。

「おはよー！おじいちゃん！」

私は笑顔で挨拶をした。

「最近…この近くは物騒じゃ…あんまり遅くならない様にしなさいよ。」

「…物騒って何？」

「…アレじゃ…」

おじいちゃんはテレビを指差した。テレビにはワイドショーがやっていて遺体発見って字が見えた。

「何のニュース？」

「最近、君と同じ小学生が三日間行方不明じゃっただろ？今朝発見されたんじゃが…残念ながら生きて帰れなかった…可哀相に…何て世の中じゃ…同じ目に遇いたくないなら学校終わるとまっすぐ帰りなさいじゃよ。」

「…うん…」

私はテレビの画面に目をやると今度は別のニュースがやっていた。母親が実の子供に暴力を振るって死なせた事件…。

「…まったく世の中は狂ってる…ワシらの時代は戦争で生き残るのに必死じゃった…だからこそ命を粗末になんか出来ない。虐待などもつてのほかじゃ…」

「私のママも虐待してるよ。」

…って言いそうになった。勿論、言えるワケがない。いくらおじいちゃんが戦争を生き抜いたからって私やママは戦争を知らない。時代は変わるんだよ…。素直にそう思う。私ってひねくれ者だな…。

「じゃっ、またね」

私はおじいちゃんにペコリと頭を下げると犬の頭を撫で、学校へ向かった。

「帰り道は気をつけるんじゃよ」

おじいちゃんは私が見えなくなるまでずっとそう言っていた。

001 朝（後書き）

ついに初投稿です。

宜しければ感想をお願い致します。

勉強になりますので。

002 下校

学校に着くと、さっきテレビで観た事件の話題で持ち切りだった。

「怖いよねえ、だつて隣町だよ?」

「あたし昨日変な人見たかも…ジッと見つめてんだよ?」

「あついた!いた!放課後でしょ?あたしも見た」

だからと言ってその人が犯人とは限らない…そんな事よりも私の母親の虐待の方が社会問題だと思う…。

- 私は胸の中でそう思いながらみんなの話を聞いていた。

しばらくすると教室に先生が入って来て同じ事を言い出した。

「みなさあ、テレビでも言ってたように隣町の小学生が学校帰りに誘拐され、残念な姿となって発見されました。これは学校としてはいち問題です。明日から登下校はあなた達の両親にも協力して貰います。今日家に帰ったらこのプリントを渡して下さい。」

プリントを配る先生。

そんな事より…私は虐待されてるんだよ?目の前の生徒はどうでもいいの?

そんな感情を抱きながら先生を見つめたが、気付くはずもなく…ま

るで無視された気分。

…仕方ないか…。

それで人の心が通じるはずがないもんね。

その日の学校は特に変わった事は何もなく普通に刻々と時間だけが過ぎて行った。

私は家に帰りたくないのに憂鬱だった。

だからと言って学校が楽しいワケではないが、家よりはマシだ。

だが、時間は止まる事なくあっという間に下校時間となった。

隣町の事件のせいで先生達は親切に校門やその近くまで見送ってくれてる。

有り難いけど鬱陶しい。

一応、家に向かったものの家に帰りたくない気持ちがある為、私は本屋に入って時間を潰す事にした。けど、すぐに飽き 大して時間を潰せてない。

それでも日は沈み、夜になりかけていた。

「…さてと…帰るか…」

私は今日も苛立つ母親に覚悟を決め、帰る事にした。

しばらく歩いた頃、ふと異変に気付いた。
いや…本屋にいた時から感じていた気がする。

「……………」。

…誰かの視線に…………。

私はゆっくりと後ろを見た。

「……………」。

人気がないいつも通る道。町並み以外誰もいなかった。
気のせいだと思い、私は歩き出した。

…ぎゅっ…ぎゅっ…

…やっぱり変だ…

確かに聞こえるのだ…。

私以外の足音が。

今度は物凄い速さで後ろを振り返った。

すると人影の様なものがサッと電柱の後ろに隠れた。

「…そこに誰がいるの？」

「……………」

その人影は私の声に反応する事もなく、電柱に隠れたままだった。

「……………」

普通の人ならそこで気持ち悪くなるだろうけど、私は違う。

「そこにいるのわかってるんだからねっ！！」

私はズカズカとその電柱に向かって歩き出し、相手の顔を見ようとした。

「…ちよっと！」

電柱の後ろを見た。

そこには確かに人がいた。

…制服を着ている男の人だった。

でも様子が少しおかしい。ブルブルと体を震わしているのだ。

「……………」

私は意味がわからなく首を傾げた。

「…はあっ…はあっ…」

そしてどこも無く息苦しい上に異臭がした。

「…はっ…はっ…」

異臭の原因がわかった。彼は尿を漏らしていたのだ。ズボンが湿ってくっついてるのがわかる。

「…見られた…」

お兄さんは急に口を開いた。

「…はっ…はっ…あの子は僕に気付く前にイッたのに…君は…僕に気付き…僕を見た…あわわ…」

お兄さんの体は更に震え、片手で頭を掻きむしっていた。

「……………」

私はさすがに気持ち悪くなり、ゆっくりと後ずさりした。

「はっ…はっ…あの子は僕を見る事は出来なかった…だって僕が…ヤッちゃったからね!…はっ…むむ…そうだよ……気付いてもヤッちゃえば皆同じさ……君だってそう思うだろ?」

ますます意味のわからない言動に私は恐くなり、すぐにでも逃げ出したかった。

お兄さんは背中に背負ってるリュックを下ろすと中から何かを取り出そうとした。慌ててる為、リュックのポケットから数枚の写真がパラパラと落ちた。

「はっ…あわわ…あわわ…また…見られた…もう何やってんだ僕は…はっ…もうっ…う…うっうっ」

お兄さんは苛立ちからか何故か泣き出した。だけど……

そんな事はどうでもいい……

そんな事より……

今…落ちた写真…

あの少女が…

泣いてる様な叫んでる様なドアップの顔と…

腕がない写真と

足が切断されてる写真と

道に落ちてるボールみたいな写真と…

あの少女が…

「…ううう…僕は何かやってんだああ…取り返しのつかない事やって…ひつく…ひつく…まだ17なのに…」

テレビに出てた

あの少女が…

学校で話題だった

あの少女が…

お兄さんは手が震えてる為、写真をつまぐ拾えてない。

「ああああ！何やってんだよおおっ！！もう！僕のアフオ！ひつくひつく…」

「お兄さんがやったの？」

「…え？」

お兄さんは鼻水を垂らしながら私を見た。

「お兄さんがあの子を？」

私はゆっくりと言った。

お兄さんはしばらく私を見ていたがまた泣き出した。

「…うううつ…僕は一体何やってんだよ…本当に馬鹿だよ…馬鹿だよ…こんな小さな子にバレる様なヘマやって…ひつく…ひつく…」

お兄さんは写真を拾うとリュックからカメラを取り出し、いきなり私を撮った。

パシャッ。

「きゃっ！」

いきなりの眩しさに目が眩む。

「…………。」

そして目が見えた頃にはお兄さんの顔がさっきと違って不気味な笑顔で私を見ていた。

003
夕闇

「お兄さん？」

「……くく…くく…うひ…うひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや」

お兄さんは鼻水を垂らし、涙目で笑ってる。

けどさっきとは雰囲気が違う。

どくと無く…私を殴る前のママに似ている…。

私は息を殺し、更に後退りをした。

「あつ
そうだ」

お兄さんはまたリュックをガサガサし始めた。

「…コレを忘れちゃ話しにならないあゝ」

そう言って鞆の中から大きなハサミを取り出した。

⌈
⋮
!
?
⌋

「コレはねえ…植木バサミって言ってね。伸びた木の枝とかチヨン

切る道具なんだ…」

「…？…そう…」

私の身体は恐怖を感じ震え出して来た。

「コレはどうやって使うか知りたい？」

「…ううん…いい！」

「遠慮しなくていいよ」

「ううん！いいっ！」

「…なんで？」

「何でもいいからっ！」

「…まあ聞きなさいって…」

「ううん！絶対嫌だっ！！」

「こうやって使うんだよっっ！！」

お兄さんは私にハサミを突き出したその瞬間、私は石に躓き、尻餅をついた。

バシャンー！！

「きゃっ」

ドスン。

「……………」

「……………」

私は倒れた体勢で上を見上げた。

私達を電柱の上からのライトが照らし、お兄さんの顔は影になって見えなかった。

ただはつきりとハサミだけが光りを反射して眩しく見える。

「うひひひひひ…」

「やだぁ！」

私はすぐに立ち上がり走った。

「…待てっ！！！」

私は走った。

相手は高校生らしいし、足の速さでは到底叶わない。

だけど走った。

必死に走った。

タッタッタッタ

「はっはっは」

タッタッタッタ

後ろを見るのも恐くて…

ただまっすぐ走った。

「足の速さでは勝てないよおお。んふふふ…」

タッタッタッタ

後ろから聞こえて来る足音がだんだん大きくなって来た。近づいて来てるのがわかる。

「はあっはあっ」

私は走りながら前方をよく見た。どうにかして逃げ切る事は出来な

いのか…。

ガシャアアン

「…え？」

後ろを振り返ると、お兄さんは横からやって来た自転車とぶつかっていた。

「…はあ…はあ…」

私はそのまま走って逃げた。

タッタッタッタ

勿論、お兄さんはすぐに走りだしていた。

私はこの辺りの家並みは大体わかっていたので、小さい身体を利用して人の家の敷地を通りながら家へと向かった。

だが、家まで走り切る持続力が続かないと判断した私はどこかへ隠れる事にした。

「はあっ…はあっ…どうしよう…はあっ…あっ…そうだ！」

私は人の家の間を通りながらある場所へと向かった。

そこは今朝行った大きな白い犬がいるおじいちゃんの家へ…。

タッタッタッタッタ

「はあっ…はあっ」

裏から入ると警戒していたのか大きな白い犬こと『シロ』がいきなりやって来た。

だが、すぐに私と気付き尻尾フリフリしながら寄って来た。

「シッ…静かに…動かないで…もっ…舐めないで…」

それでもおさまる事なく、私をど突き倒しそんな愛情表現。

「シッ…お願いだから静かにしてて…」

タッタッタッタッタ

奥から足音が聞こえて来た。

「……怖いっ!」

私はすぐに『シロ』の家へと逃げ込んだ。
大きな犬だから私も簡単に入れた。

「はあっ…は………」

そして息を必死に殺した。

タッタッタッタッタ

足音は確実にこちらへ向かって来た。『シロ』も人の気配に警戒している。

タッタッタ……タッ…

『ウワン！ウウワン！』

『シロ』の吠える声が聞こえた。

「……………」。

私の目には犬小屋の出口とその外側の芝生しか見えない。
『シロ』は少し離れた門のトコにいるはずだ。

『ワン！ウワンッ！』

「……………」。

『ワン！ウワンッ！』

「…………。」

『キヤウウウウーン』

「……………！？」

『シロ』の声が変わった。

『キヤイイウウウン…ウウイイイン…クウーン』

『シロ』の泣き声が暫く続くと、今度は逆に全く声が聞こえなくな
った。

私はゆっくりと唾を飲み込んだ。
そしてずっと目は外側の芝生を見つめている。

「……………」

しばらく全く声も音も聞こえない。

お兄さんはどこかへ行ってしまったんだろうか？

その時である。

ボトツ。

何かが上から芝生に落ちて来たのだ。

「……………!!」

私は両手で自分の口を塞いだ。
思わず声が洩れそうだったから…。

上から落ちて来たものは『シロ』の生首で、
綺麗に切られた後、
乱暴に投げられ、
落ちて来たのだ。

薄暗くてわかりにくいが…
『シロ』の目がこっちを見てる気がする。

「…つつ…!!」

そして次に、芝生にお兄さんの足が現れ、
生首を素手で掴み上げた。

「……………!!」

「バカ犬め…」

お兄さんはそう言つと、『シロ』を私の隠れている犬小屋へと投げ込んだ。

『シロ』の顔が私の膝にゴロンと乗り、更に目が合ってしまった。

「……!!」

私はすぐに目を閉じ、口を塞いでる腕を更に強くした。あまりの衝撃に泣き叫びそうだったからだ。

「…あの子はまだ近くにいるはずだ…ひっく…絶対…ひっく…絶対見つけてやる…!」

独り言を残して、お兄さんは何処かへ走って行った。

「……。」

「……………」

「……………」

どれくらい時間が過ぎただろうか…もしかしたらまだ1分しか過ぎ

てないかも知れない。

暗闇と芝生と膝にある重みがだんだんリアルに感じ、私は膝からゴロンと落ちた『シロ』を踏みながら勢いよく芝生へ滑り込みをした。

「……………ひいゝ」

ズササッ。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

私はすぐに立ち上がり、走りだしたが、何かに躓き、また倒れる。

ドサッ。

「…はぁっ…はぁっ…」

そこには『シロ』の胴体が転がってた。

「…はぁ…ひっ…ふぐ…ふぐええ…ひええ…」

私の目から大量の涙が溢れて来た。

「ふぐっ…んええ…ひえっく……」

どんなに我慢しても声が洩れる。

ただただ恐怖が体の底から溢れ出し、
体がそれに反応しているだけだった。

それでも私は真っ直ぐ家へと向かってた。

あんなに帰りたくない家でも体は自然と家を求めている。

母親を求めている。

003 夕闇（後書き）

何だかグロいね。

ぜひ、感想下さいな

004 帰宅

私はフラフラになりながら…
そしてお兄さんに見つからないよう周りに神経を尖らせながらゆっくりと家へと向かった。

私の肌や衣類には『シロ』の血が付いていて少し生臭いカンジがした。

「…はあっ…はあっ」

そしてついに私の住んでるアパートが姿を現して来て私は安心感に包まれた。

「…はあっ…はあっ」

重い足を必死に走らせ、一刻も早く家に帰りたいかった。
急いでアパートの階段を駆け登る。

カンカンカンカンカンカン

「はあっ…はあっ」

今日はいつもより帰りが遅い…。

もしかしたらママは怒っていて私に暴力を振るうかも知れない。
でも今だけの我慢だ。

あのお兄さんに変なことされるよりかはマシだ。

ガチャツ。

「ただいま」

ドアを開けるとママが奥から顔を出した。

「おかえり…アンタ遅かったじゃない…」

「ごっ…ごめんなさい…友達と話してたら遅くなっちゃって…」

「…風呂沸いてるよ…入りなさい…」

ママはそう言うつと着替えを私に投げ付けた。

「…はい…」

私は落ちた服を取り、バスルームと足を運んだ。
何にしてもママがあまり怒ってない事に安心した。

ボタン

私は体についてる『シロ』の血が気持ち悪く、すばやく服を脱いだ。

そついや、この血に気付かなかったのかな？

ふとそう思い、全裸になるとシャワーを浴びた。

シャアアアアア

そして今日あった事はママには内緒にしようと思は決めていた。
乱暴に体を洗うとすぐに湯舟に浸かった。
怯えながら逃げた為、かなり体は疲れきっていた。

チャポッ

「…………ふう。」

私はとにかく無事に家に着いた事を喜んだ。

安心した。

「…………。」

しばらく湯舟に浸かっていたら凄い眠気に誘われた。

お湯が身体を温め、頭がクラクラする。

「……ん……」

瞼が重くなり、目はほとんど閉じかけていた。

そして一瞬の暗闇が何回も訪れ、思考回路もストップしかけていた。遠くで何か音がした。

ボタン。

「…はっ!？」

目の前でママがこっちを見ていた。

「ママ?」

ママはいきなり私の頭を掴んで言った。

「もう重荷なんだよっ!！」

「……!？」

ママは全体重をかけて私の頭を湯舟に沈めた。

ジャボツ

「……っつ！？」

私はびっくりしてお湯から出ようとするが、押さえ付けられて頭が
あがらない。

バジャッバジャッバジャッ

「…もう…嫌…嫌なの…」

「…ん…っ…ん…」

私は更にもがいた。

だが、頭をお湯から出すことが出来ない。

バジャバジャバジャバジャ

「…くっ…許して」

「…ん…ゴボボツ…ボツボツ…んぐぐ…」

バジャバジャバジャバジャ
バジャバジャバジャバジャ

「…許してええ…」

バジャバジャバジャバジャ
バジャバジャバジャバジャ
バジャバジャバジャバジャ

私は死に物狂いでもがいた。
そのもがいた手がママの目に当たった。

「きゃっ！！」

ママの力が緩む。

その瞬間私の体は湯舟からびっくり箱の様に飛び出した。

バジャジャ

ドサッ

「はあーっはあーっはあーっはあーっ…
んごほっ！ゴホッ！ゴホホッ！」

私は噎せながらママを見た。

ママは凄く恐ろしい形相で私を見ていた。

「お前ってヤツは母親に反抗する気か！？さっさと死ぬんだよ！」

「…ごほっ…いやあああああ！」

私は立ち上がるとすぐに風呂場から逃げ出し、奥の部屋へと走った。

「はあ…はあ…はあ…ごほっ…ゲホッ…」

私は弟の『まさき』の元へ行き、

『まさき』を起こして逃げよう考えた。

「まさきっ！まさき起きてっ！！まさ…き…？」

『まさき』が冷たかった。

うつすら口を開け、ピクリとも動かない。

ママが風呂場から出て来て -

「…もう疲れたのよ…

アンタ達を育てるのも…

生きるのも…

もう全てを投げ出したいの…」

かすれた声でそう言った。

「…………ママ？」

「だから…

だから一緒に死のう？

ママも後から逝くから…ね？」

「…いや…いやだ…」

「じゃあアンタどうやって生きて行くの？」

まさきもママも死んでアンター人でどうやって…？」

「…ひつく…でも…いやだ…ひつく…死にたくない…」

「…もうどうする事も出来ないの…わかって…」

ママはいきなり両手を構えながら走って来た。

「いやあああああ！」

私はうまくママをかわし、ドアを開け外へ飛び出した。

「待ちなさいっ！」

「いやあああああ！」

カンカンカンカンカン

階段を下り、すっかり暗くなった住宅街へ飛び出す。

後ろからママが追っ掛けて来る為、また『シロ』のいる家へ隠れようと考えた。

それしか思いつかない。

タッタッタッタッタ

角を曲がればその家がある。
私は角を曲がった。

⌈
⋮
!
?
⌋

だが、そこには何故かさっきのお兄さんが立っていた。

「みいーつけあ」

そう言つと植木バサミを私に突き付けた。

「あつ！」

私はすぐに反対側へ逃げた。
だがママが奥に見えるので別の角を曲がり逃げた。

「いやああああああ」

私はまたまた必死に走った。叫びながら走ってるものの、街の人は私の声に無反応だ。

「誰かああたすけえてえええうええ！」

少し大きな通りに出た瞬間、右側の道路から二つの大きな眩しい光が私を襲った。

キ
イ
イ
イ
イ
ー
ツ

004 帰宅（後書き）

しばらくお待ちしてません。

005 乗車

キイイイーツ

眩しい光と大きな音。

勿論、それは走って来た車だった。

私が思わず道路に飛び込み、

車は私を轢く寸前で停まってくれた。

私はただびっくりして固まって動けなかった。

「こらぁー！危ないだろーが！…って…え？」

運転手さんは全裸の私を見て目を丸くしていた。

「…どうした？」

車からおりて近づいて来る。

「……………あ……………」

私は裸だった事もあり、男の人に声をかけられるのが恐かった。そして背後からママがやって来た。

「はぁ…はぁ…アンタ何やってんの！ママと家に戻るのっ！」

「おじさん怖いっ！助けてっ！私殺されちゃう！」

私はとにかく苦手なこの男の人に助けてもらおうと甘えた。

「何だって！？本当なのか？」

私はただ首を縦に振った。

「違うんです！この子はオーバーに言ってるんです！

第一、私の子供ですよ？他人のあなたには関係ないでしょ？」

「おじさん助けて！私…ママに…ママに殺されるっ！」

私は必死に訴える。

ただおじさんは困惑しているだけだった。

「もう…この子ったら…ワケのわからない事を…」

「本当だよ？私…今、連れ戻されたら殺されちゃう！」

おじさんはしばらく私の顔を見つめ、そして手を引っ張り車の助手席へ誘導した。

それを見たママが慌てる。

「ちょっとアンタっ！うちの子を何処に連れて行く気？
アンタのしてる事はりっぱな誘拐だよ？」

助手席のドアが開く。

「さっ…乗って…」

私は遠慮なくすぐに飛び乗った。

「ちょっとアンタ！」

ママが怒鳴るのを無視しておじさんは運転席に乗り込む。

ママは助手席の窓を叩き出した。

バンバンバンバン

「アンタうちの子をどうしようっての！？アンタも早く降りて来なさい！」

ママは凄い声で強く窓を叩いていた。

私は怖くなって後ろの席に逃げ込んだ。

そして車のエンジンが鳴る。

「ちょっとアンタ！本気で逃げる気？」

ママとまさきを残して生きて行くの？

そんなのアンタの幸せじゃないよ…！

ここで死ぬのが私達の運命なんだよっ！」

バン！バン！バン！バン！バン！バン！

「…ママもうやめてええええ…うわああああん…」

バン！バン！バン！バン！バン！バン！

「泣いたって何も変わらないんだよ！

早く車から出て一緒に……」

ブウウウウウーン

車は凄い早さで動き出した。

あっという間にママが小さくなって行く。

ママが走って追い掛けるのが見えた。

私はただジッと見つめるしかなかった。

ただ泣くしか出来なかった。

「うあああくん……ううう……ひつく……えつく……」

「……もう大丈夫だから……泣かないで……」

「ああああんっ……ひつく……だって……」

私は左手で涙を拭いた。

すると妙な感覚があった手に赤いモノが付いてるのだ。

「……何だアレ……」

運転手のおじさんがそう言うので私は泣きながら前を見た。
道の向こうで立っていたのはあのお兄さんだった。

「……怖い……停めないで……」

「……え？」

運転手さんは不思議そうに私を見たが、すぐに

「・・じゃあ殺そうか・・・」

・・・と言った。

「・・・え？」

と、今度は私が驚いてると、

ゴンッッ。

と音だけが聞こえ、目の前にいたお兄さんの姿は見えなくなった。

ブウウウウーン

車はブレーキをかける事なく進む。

「・・・今の・・・あの・・・お兄さんを轢いたの？」

私は恐る恐る聞いて見た。

運転手さんは少しの間の後、

「・・・ははは・・・まさか・・・」

車の停まる気配無いのを感じて逃げて行っただよ・・・」

「・・・そう・・・」

私は車の前の部分がへこんでいるのに気が付いたが、あまり考えないようにした。

どっちにしろあの場合から逃げたかったから…

ブウウウウン

「……………」

「…なあ、君のパパとママは仲良かったかい？」

突然の質問。

私は普通に答えた。

「仲悪かった。だから離婚したよ…」

「…そっか…」

私は手に付いてる赤いモノを思いだし、ティッシュを探し始めた。

「…あの…すみません…ティッシュありますか？」

「…あるよ、はい。なんで？」

「…手に赤いモノが…」

「赤いもの？」

私はティッシュを一枚取り出すとゴシゴシと左手を拭いたが、
湯きかけていたのか中々落ちない。

「…ん？」

よく見たら、

私の隣には大きな白い布で覆われていた何かがあった。

「……………」

左手の赤いモノと隣の白い布。

……嫌な予感がある。

「…今日…妻と喧嘩したんだ…ほんと…些細な事で…」

突然に喋り出す運転手。

嫌なタイミングで…。

「…自分は割と冷静だったんだが…

妻が凄く怒っててね…

しまいにはキッチンから包丁を取り出して…

この私を刺したんだ…」

「…………え!？」

「その左手の赤いモノは多分…
私の血だろう…」

最初に抱き着いた時に付いたかもしれない…
ちよつと右側の脇腹を刺されたからね…
それに出血も激しくて…」

ブウウウウン。

「……………」

「…それで…おじさんの…おくさんは？」

「…キミの隣にいるだろ？」

「…………っ!？」

私はその白いモノからすかさず離れ、窓際に寄った。

「…キミもずっと裸で寒いだろ…?その白い布を使うといい…」

「…………ええ？」

私は怖くて、白い布を取る事は出来ない。
だから無視して外側の景色を見てた。

ブウウウーン

キキッ

車が急カーブをした。

バサッ

隣の白い布が私に覆いかぶさって来た。

「きゃっ！」

私は払いのけようとするが、重みで中々戻らない。

「…やっ…やだ…」

手や足を使って乱暴に払っていると布の中から女の人の頭が出て来た。

「いやあああああつ」

006 下車

「いやああああ」

女の人の顔が私の目の前に現れた。

「ううつ…もう…やだ…やだよおお」

私はバシバシと白い布を叩きまくった。
すると突然、その女の人目が開いた。

「え!？」

「彼女は…まだ生きている…」

おじさんが言った。

「…いつ…生きてるよ…だって今、目を開けてるんだもん」

女の人は周りをキョロキョロと見渡していた。

「…お嬢ちゃん…悪いが車から降りてくれないか？
その彼女の白い布を持って行って構わないが…」

「…出るっ出るよ…だってこっちも怖いモン…車…停めて…」

私は女の人をゆっくりと押し、
何とか元の配置に戻した。

女の方は口をヒモで縛られ私に何かを訴えていた。

ブウウウウウーン

だが、車は一向に停まる気配がない。

「……？あの…おじさん…車…停めて…？」

「…はあ…ははは…はははは…」

いきなり笑い出すおじさん。

「…停めてよっ！」

「…はは…無理な話した…さっきも言っただろ？
こっに見えても出血が激しいんだ…」

すでに下半身はほとんどマヒ状態で動かないんだ…
ブレーキを踏む事が出来ない………」

「…じゃあどうやって…私は降りるの？」

「ドアを開けて道路に飛び込め。

こうなる事を予想して車の少ない港に来たんだ。

飛び込んでも後ろから車が来たりしないから
怪我は少ないはず……」

私は窓の外を見た。

暗くてよく見えないが、

確かに海らしきモノが奥に見える。

「元々二人で死ぬ気だったんだ……」

だから俺達の事は心配するな……

はあっ……はあっ……やばい意識が遠退いて来た

……はあ……はあ……」

ブウウウウーン

私は女の人を見た。

目から涙を流し、私に助けを求めている。

……だけど私にどうしろと？

私は女の人に包まれている布を全部剥ぎ取った。

案の上、体もロープで縛られている。

解こうと試みたがきつく縛られ子供の私には無理だった。

「お嬢ちゃん……はあ……はあ……」

そろそろ降りて貰わないと……

この車はあと少しで海へドボン……だ……

はあ……はあ……はあ……」

ブウウウウーン

前方を見ると道が奥で途切れてるのが見える。
私は焦った。

「おじさん！お願いだから車を停めて！停めてよ！」

「はあゝ…はあゝ…はあゝ…はあゝ」

…む…り…む…り…はあゝ…は…」

ハンドルを握ってるおじさんの手がガクツと膝に落ちた。
私はすぐに女の人に向きを変え、

「おじさん…死んじゃった…どおしよう…どうしよう…」

ブウウウウウーン

女の方は首を斜めに振って目はドアを見ていた。

「…このまま…車から…飛び降りるの…？」

その質問に勢いよく首を縦に振る。

ブウウウウーン。

だんだんと海が近づいていく。

「わかった…ドアを開けて外に突き落とすから…」

私がそう言つと女の方は首を思いっきり縦に振つた。

ガチャツ。

ブウウウウーン。

「行くよ…」

女の方は何回も首を縦に振る。

私は少し呼吸をすると両手に力を入れた。

ドンッ。

女の方はゆっくりと倒れ込む様に車のシートから離れて行つた。

「……………」

ブウウウウウーンッ

ドザアッ

「…………え？」

…………ロープが続いてる。

私はシートの下にあるロープを視線で追うと
運転席へと続いていた。

「…………これって…」

ブウウウウーン

「…あっ」

もうほとんど目の前が海だった。
私はすかさずドアを開け、外へ飛び込んだ。

「……………っっ！！」

ドッ。

ゴン　　ゴン

ゴロン　　ゴロン

「きゃあああぁ」

ゴロン　　ゴロン　　ゴロン

グルグル回る視界が治まった瞬間、
今度は車が海へ落ちる音が聞こえた。

バツジャアーン

「……っつゝ……」

私はゆっくりと上半身を起こした。
裸である為、体中擦り傷だらけだった。

「…はぁ…はぁ」

私は周りを見渡す。

奥の方で女の人が転がってるのが目に入ったので、
私は立ち上がるとヨタヨタと女の人の方へ歩き出した。

「…はあ…はあ…」

ザッ…ザッ…ザッ

「…はっ…はっ…」

ザッ…ザッ…

「…あ…あの…おばさん…おばさん！」

私は女の人の肩を揺らした。

「おばさん！起きて！起きて！ねえ！」

女の人は私の声に反応して目を開いた。

「…良かったあ…生きてたんだあ…」

女の人は首を縦に振った。

…その瞬間、

女の人は凄く早さで海の方へ移動し始めた。

「…………え？」

彼女に巻き付いたロープの一部が車に巻き付いていたからだ。
みると彼女は小さくなり

そしてあつという間に海へ引つ張られた。

ボシヤン。

「おばさああん！」

私は海の方へ走り、下を見た。

「……………」。

ゴボゴボと車からの空気の漏れる音と波の音しか聞こえない。女の姿はとつくになかった。

「……………」な……………」

私は座り込む。

「……………」な……………」な……………」

そしてまた涙が溢れ出す。

「……………」うえ……………」うえええん……………」もう……………」いやだああああああ……………」ああああああん……………」うわああああああん……………」

私はとにかく泣いた。

そして泣きながら歩いた。

夜の港は本当に暗くて寂しくて……………」

人ひとりも姿が見えないのだ。

それでも私はただただ泣いた。

「あああああああん」

しばらく泣きながら歩いていると、
黒い大きな影の様なものが動いてるのが見えた。
私は人だと思い助けを求めながらその影へ向かって走り出した。

「ああああああああん」

だが、近付くにつれ その黒い影が人間でない事に気付く。

「あああ……あ？」

『……グルルル……』

それは大きな黒い野犬だった。

私に牙を向け、今にも襲いそうだった。

私はただ固まっただまま動けなかった。

006 下車（後書き）

だんだん有り得ない展開ですな？
だから楽しい（笑）
次回ももっと有り得ません。

007 拉致

黒い野犬の口からよだれがダラダラと流れ、
唸り声が聞こえる。

「……………」

私が一歩後ずさりをする、野犬が一歩前に進む。

私はとにかく逃げなくてはと考えた。

だが、相手が人間ではなく犬だから余計に敵うはずがない。

…でも逃げるしかない。

『グルルッ』

野犬の声が聞こえた瞬間、私は走り出した。
それに合わせて野犬がジャンプをした。

野犬の牙が私の左腕に噛み付いて来たのだ。

「ぎゃああっ」

私はあまりの衝撃に倒れ込んだ。

野犬を下敷きにして。

ゴキキッ！

『キャウーン』

ちょうど私のひじが犬の喉を直撃し、
腕から牙が離れた。

ドザザーッ

その衝撃で犬は動かなくなった。

「…はあっ…はあっ」

「何をしておる。」

声がしたので振り返ると老人が立っていた。

「……あ…ああ…助けて！
犬に襲われかけましたあー」

私は人がいないと思ってただけに喜びも大きく、
老人の元へ走り出していた。

「あああああ」

バキッ

私は老人によって殴られた。

「んぎゃっ」

ドサッ。

「…お前があのだをあんなにしたのか？
このメスブタめええー！」

老人はスタスタと倒れている犬の元へ歩み寄る。

「おおっ…首の骨が折れとるじゃないか…
可哀相に…うんうん…
後でその山に埋めてやるからな…」

老人はそう言うのと犬の首輪を外し始めた。
暗闇で見えなかったが首輪をしてたらしい。
つまり、この犬は老人の犬だったのか…。

「…ひつく…ひつく…」

私は殴られた頬を押さえながら老人を眺めていた。
老人はスタスタと私の元へ歩み寄ってこう言った。

「…今日からお前があのだの代わりをやれ。」

「…………え？」

ガシャン

私の首に犬の首輪を付けた。

「…いやっ…嫌だあ」

バチンッ

「お前は犬だっ！犬が言葉なんか喋るはずがないっ！それに飼い主の言う事が一番だっ！わかったか！？」

「ひつく…ひつく…私は犬なんかじゃない！」

バチン！

老人は容赦なく私を殴る。

「お前は犬だっ！これから一生なっ！」

「いやだっ！いやだあああああ！」

「まだわからんのかっ」

バチンッ

ハチンッ

「…いたあいよおおおお…うわあああーん」

あまりに泣き叫ぶ私に老人はハンカチを口に詰め込んだ。
そしてポケットから鎖を取り出し首輪に繋げた。

「さあ…行くぞ！」

老人は肩に犬を担ぐと私を鎖で引つ張り歩き出した。
私は手で口に詰められたハンカチを取ろうとすると
蹴っ飛ばされた。

グシッ

「家に着くまで絶対に取るなっ！
それから立って歩く事も禁止だっ！！
お前は犬なんだからな！
犬の様に四本足で歩くんじゃっ！！」

「…ひつく…ひえつく…」

私はただ恐くて言われた通りに
犬の様に四本歩行をした。

「やれば出来るじゃないか…
しかし遅いな。もっと早く歩かんかいつ…！」

グシッ！！

また蹴っ飛ばされた。

私は泣くのを堪え、

すぐにまた犬の様に歩き出した。

港の隣には山があつて、

おじいさんはどうやらそこに住んでいるようだ。

「…ワシは社会から逃げた人間じゃ。

だから誰も友達はおらん。

この犬だけがワシが唯一心を開いていたのに…

お前はそれを奪ってしまった…」

「……ごめんなさい…」

そう謝るとまた力強く蹴られた。

グシッ！

「犬は言葉なんて喋らんっ！」

「……………」

私は黙ったまま歩き続けた。

しばらく歩くと奥に小さな明かりが見えた。

「…やつ…家じゃ…」

私はトイレに行きたくなってたので
おじさんにトイレを貸して欲しいと言うと
また蹴られた。

「犬が言葉など喋らん！

それにお前は犬なんだから

人間様のトイレを使って用を足すなんて生意気なっ！！
そんなにしたけりゃ、そこら辺でやるんだなっ！！」

「……………！？」

「何を我慢しておる。

さつさとやるんだっ！

ワシ以外見てる人間などおらんっ！！」

私はただただ首を横に振った。

「ふん！だつたら我慢してるが良い！

どうせ後で我慢出来なくなる…

そこに犬小屋があるだろっ！今日からお前の家だっ！！」

「……………！？」

犬小屋を見た。

すごく汚くて…臭い。

おじいさんはそのまま奥へ行った。

「……………」

首輪と鎖は付いてるものの、
鎖をどこにも付けてない。
逃げようと思えば逃げられる。

「……………」

だが、ここが何処かもわからないし、
正直逃げる体力は限界だった。
だから私はこの汚い犬小屋で少し仮眠を取って
夜明け前に逃げようと考えた。

犬小屋に入ると1分もしないうちに
私は眠りの世界へと入った。

「……おい。」

「おい！起きろ！朝飯の時間だっ！」

「…はっ！？」

私はびっくりして犬小屋から出ると
外は既に明るく朝になっていた。

「おいしい肉汁だっ！食べっ」

大きな皿に香ばしい匂いを漂わせながら

湯気を立てて私の前に置かれていた。
考えてみれば、昨日の給食以来何も食っていない。

「……ゴクッ」

私は唾を飲み込むと我慢出来ずにむしゃぶりついた。

「…んぐつはぐつ」

「ははは…そんなに旨いか…？」

「んぐはぐむぐぐぐ」

何も考えず手でむしゃぶりついていた。
味はそこまでおいしいものではなかったが、
腹が減ってれば味なんて関係ない。

「んぐつもぐつズズズ」

「…この肉はな、昨日お前が殺した犬の肉だつ。
お前が殺したんだから責任持って全部食うんだぞっ」

「んぐつ…え？」

私がおじいさんを見ると、
おじいさんはニコリと不気味な笑みを浮かべた。

007 拉致（後書き）

次回いよいよ最終話です。

008 脱出

「あの犬だつてお前に食べて貰えば浮かばれるだろう…有り難く頂けよ」

「……んぐっ…おえっ」

私は犬だと知って嘔吐が押し寄せて来た。

「こらっ！吐いちゃいかん！
勿体ない！残さず食うんだっ！」

おじいさんは私の頭を掴むと『犬汁』に顔を押し付けた。

「いやあああああ」

「食えええええーっ」

「いやだあああっ…やあああああ」

「食うんだっ！馬鹿者おおおーっ」

更に強く押し付けられた。

「んぶぶぶぶ…」

「食べっ！食うんだあ！」

「ぶぐぐぐ…」

私は思い切り抵抗し、

『犬汁』の入ってる器をひっくり返した。

「この馬鹿者があああああ！」

お前のせいで死んで行った犬を
無駄にする気かあああゝっ！！」

バシッ！ ゲシッ！ ゴンッ！

おじいさんは狂った様に私を蹴り出した。

「いたあい！いたいあよおおっんわああーん」

ゲシッ！ グシッ！ ドガッ！

「犬が言葉などしゃべらあああああんっ！」

「いやあああああ！」

私は叫びながらおじいさんに体当たりをしようと
おじいさんはバランスを崩し倒れ込んだ。

ドサッ。

「あああああああ！」

そして、私はすぐに走り出した。
おじいさんが追い掛けてくると感じたからだ。

タッタッタッタッ

「……はあ……はあ……はあ」

タッタッタッタッ

私は無我夢中で走った。
だが、残念な事に逃げた方向が
ますます茂って来て山の中へと入っていた。

「はあっ……はあっ」

奥に行くのは危険と感じつつ
……でも今更さっきの場所に戻るなんて……。

「…はあっ…はあっ…」

少し歩いていると、
後ろからガサガサと音が聞こえて来た。

「……………!？」

「何処に逃げたんじゃい！」

おじいさんの声がしたので私はまた走り出した。

タッタッタッタ

「はあっはあっはあっ」

「待て待て待てえええ」

おじいさんは凄い早さで追い掛けている。
私は必死に逃げるものの、
場所が森なだけあって木々の間を通るだけで
体中が傷だらけになっていた。

「はあっはあっはあっ」

「待て待て待てええ」

「はあっはあっはあっ」

タッタッタッタ

ザッザッガサッガサ

「はあっはあっはあっ」

このまま走り続ける自信のない私はどこか隠れる場所が無いか考えた。だが、木以外何もないその場所では何処に隠れようって言うのだ。

「はあっ はあっ」

おじいさんが追い掛けて来る反対側、いわゆる前の奥の方から何か音が聞こえて来た。

「…あれは何の音？」

耳を澄ますと、工事現場の様な音がする。

「もしかすると…あそこに人がいるかも…」

「待て待て待てええ」

後ろからまた声がした。
向こうの人達の所まで間に合わない。

私は周りを見渡した。

「……そうだった」

私は思い切って木に登ることにした。
ちょうど枝の多い高めの木が目に入ったから
思い付いたんだけど。

「…はあっはあっ…よし」

私は呼吸を整えると、
まず手の届く小さな枝に右手で掴み、
右足を少し飛び出てる部分に足を掛け、
全体重を掛けて足を伸ばした。

「はあっ はあっ」

そして今度は左手の届く枝を掴み、
左足が掛かる場所を探す。

「はあっ はあっ」

それを見つけると、
今度は左足に全体重を掛け足を伸ばす。
それを繰り返した。

「はあっ はあっ」

ある程度高いところまで登ると今度は息を殺した。

「はあっ……は………」

「待て待てええええ」

おじいさんが木々の間から斧を振り回しながら出て来た。
私は思わず唾を飲む。

「……ゴクッ」

「待て待てえええ……あれ！？
ここで止まってるぞ……」

「……どこだ？この辺だな……」

おじいさんは犬の様に
鼻をクンクンさせながら歩いていた。
長年山にしていると臭いで
人の気配とかわかるのだろうか……？

「……………」

そしてついに私の隠れている木の下に辿り着いた。

「……ふんふん……ここか……」

そしておじいさんはゆっくりと顔を上げた。

「みいゝつうけたあ」

ニヤリと笑いながら言った。

「…………ひいつ」

びっくりした私は
枝から足を滑らした。

「…きゃあっ」

その衝動で鎖が木の枝に絡まる。

ガクンツツ！！

「ぐげげっ」

鎖が枝に巻き付いてる為、
そして鎖が首輪に付いてる為、
私は首吊りの状態になった。

「ぐげげえげげっ！」

首の圧迫が顔中の血管を止血して息が出来ない。

そして自然と目が上を向き、
舌が口から飛び出そうなくらい出て、
手が首輪を無意識に外そうとする…
…が、外れるワケがない。
足はただバタバタと
空中を泳いでるかの様に動いている。

「げっげええげっげっぐぎぎぎぎんぐっじゅっ」

もがいてる私をおじいさんは楽しそうに見ていた。

「ははは…いいぞ！いいぞ！」

「げえええううぐげげ」

少しずつ視界が白くなり意識がもうろうとし始めた。
相変わらず身体はバタバタと抵抗している。

「ははは！いいぞお！いいぞお！」

手をパチパチと叩き、
楽しそうに踊りまくるおじいさん。
その時、奥から声がした。

「そこにいるのは誰だっ！」

そう声がした瞬間、私は意識がなくなった。

その日の夕刊に私の記事が載った。

『行方不明の少女、自宅から20キロ離れた山から意識不明の重体で発見。』

死にかけたところ、
山で作業してた人達に助けられたらしい。

.....。

.....。

「.....はっ。」

私は夢から覚めたような感覚に襲われて目を開いた。

「.....。」

「起きた？ねえ.....私が誰だかわかる？」

見覚えのある顔が覗き込んでいた。

私はただ首を縦に振った。

「良かったあ…あんた二日間意識無かったのよ?」

「…………ママは?」

「ママは…今はいないわ…
しばらく会えないかもね。
退院したら…おばさんと一緒に住もう?」

「…………まさきは?」

「…まさきくんは持病の発作で…
喘息で亡くなったわ。ここを退院したら
叔母さんと一緒に住もう?」

そこにいるのはママの姉で叔母である。
私はその叔母が嫌いだったので
「うん」とは言えなかった。

「…………可愛くないガキね…………
それより最近、テレビで今回の事件が
毎日の様に特集され放映されてるのよ!
アンタは今、話題の人なの。」

「…私が?」

「そ。これからいくつもの番組やインタビューに

答えなきゃいけないのよ？アンタは！
結構なギャラで契約してるから宜しく〜！」

「でも私…何も…」

「事件の夕方から翌日までの事を
そのまま話せばいいのよ。

あつ、言っとくけどこれからは
アンタの面倒はあたしが見るのよ？
ここで少しでも金が必要なの！
だからテレビを断ったりしたら
どうなるかわかってるんでしょね？」

「……………」

叔母は鏡を見ながら化粧をしだした。

「…さつ、先生を呼んでくるわ！
あなたの意識が戻る感動な場面だものね。」

叔母さんは目薬を差し、勢いよくドアを開け

「先生〜！意識が戻りましたあ〜！！！」

大声でそう言いながら走っていった。

私は色んな不安を抱えたまま
先生が来るのを待った。

あんなに殺されかけたのに何故か命は助かった。

神様が助けてくれたのだろうか…？

…いや、逆に私は神様じゃなく
悪魔に気に入られてるかも知れない…。

何となくそう思った瞬間、
病院の非常ベルが鳴った。

「…え!？」

t h e e n d .

008 脱出（後書き）

これにて完了です。

ありえない展開など80年代ホラーを意識して作りました。いつか、
続きを書いてみたいです！

最後まで読んでくださって有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4424a/>

Tomorrow's evening newspaper

2010年10月21日20時23分発行